太棹

第百三十二號

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十七年一月廿二日印刷納本
昭和十七年一月廿五日發行

（毎月一回廿五日發行）

太棹（第百三十二號）

野澤道之助待合を始めた
三度に一度は行かずばなるまい
ズンベラ〳〵
向島にて十六島山が出て來て（サアビス）
酒も梅よし行かずばなるまい
ズンベラ〳〵

本所區向島須崎町九五
御待合　梅よし
電話墨田四七五五番（シナイイ）
水島春枝

道順（須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲つて二軒目）

淺草區雷門二丁目一九
淺草宅　野澤道之助
電話淺草三七九番（ミナク）

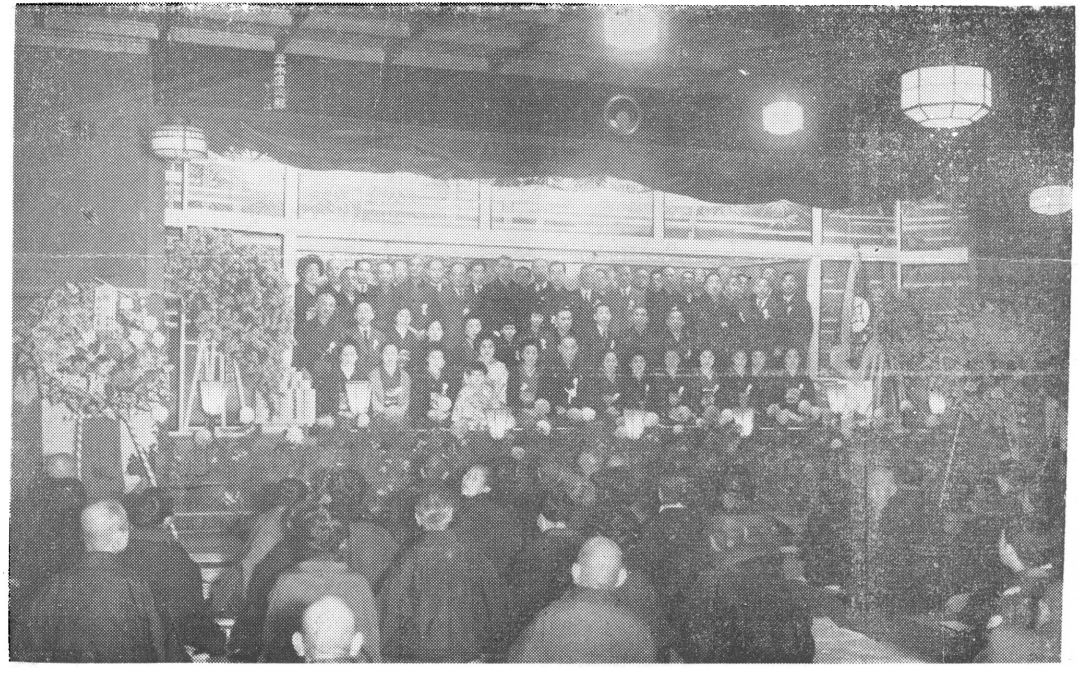
松幸

すき燒
和洋御料理
淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸（87）〇三八〇番
二〇〇〇番

風流・金ぷら・茶漬
（美地句）
大日屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

乃村乃菊氏病氣全快祝賀記念

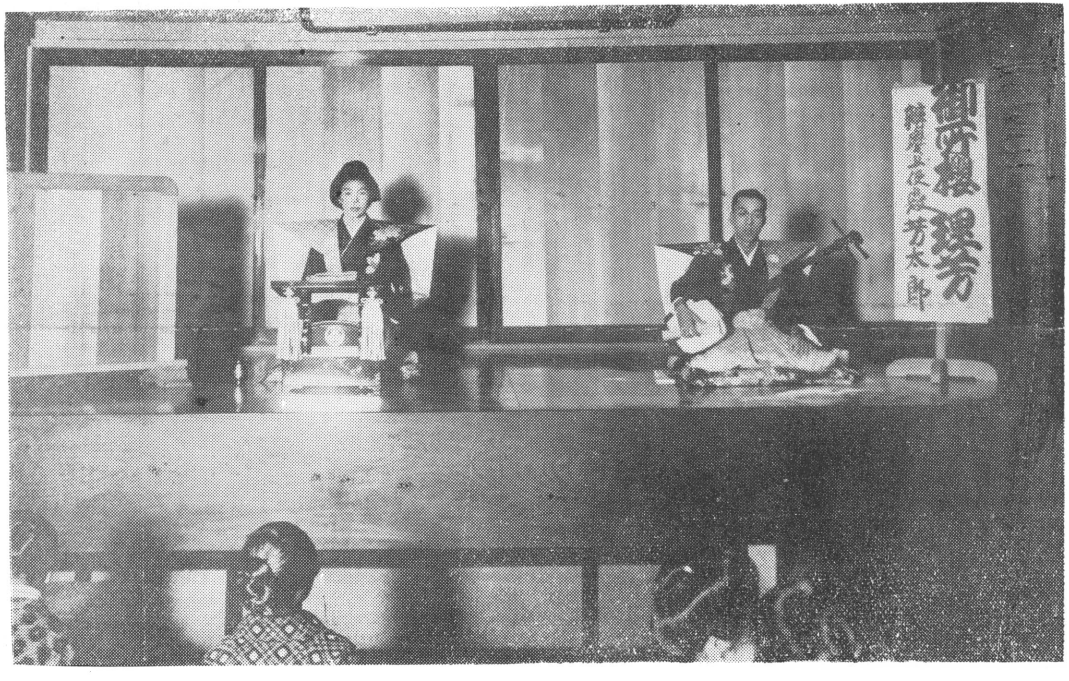
前號詳報の如く乃村乃菊氏の病氣全快祝賀會は昨冬十一月廿六日正午より並木倶樂部に於て賑々しく開催されました。



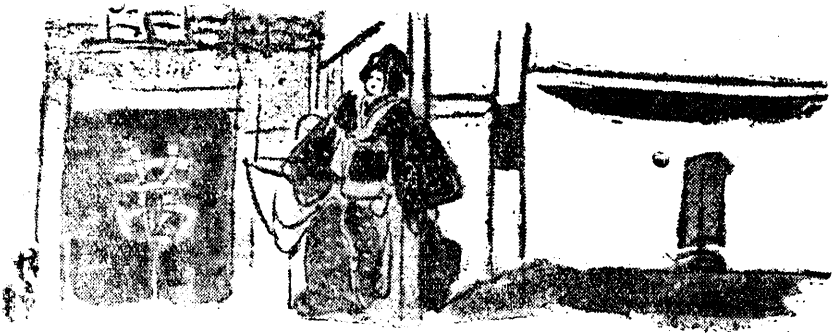
寫眞中央が乃村乃菊氏と乃村氏夫人・乃村氏の右より鶴澤清一、竹本佳照の兩師、外五十義會、互調會・淨聲會、佳照會其他の諸氏。

神馬里芳女史初心時代の見臺披露

芳聲會勝助連で東都女流素義界の重鎮、神馬里芳女史は今から十九年前斯界に名乘りをあげてまだ一年もたゝぬ大正十三年十月七日神田倶樂部で盛會に見臺披露を催ほした。寫眞は豐澤芳太郎師の絃で辨慶上使を語る里芳女史が、橘を描かせた肩衣を師匠共々引戻いた是。其の思ひ出こと今度比の



お寫眞を出させて戴きました。御覽の通り神馬女史を始め、芳太郎師のお若いこと。當日は鈴木一朝、一信の御兄弟に、折笠一秀、尾島尾昇氏等に猿喜知師の連中も應援出演して、華々しいものであつたと。（此時は理芳であつたが、後で里芳と改む）



太棹 第百三十二號目次

文樂座拾遺……西尾福三郎…(二)
親馬鹿の記……本山荻舟…(四)
師走の演舞場文樂雜感……中山泰昌…(六)
文樂人形小道具帖(五)……宮尾しげを…(八)
佐渡が島に殘る鄉土藝術……伊藤紅二…(一〇)
藝界交遊錄……齋藤拳三…(一四)
文樂樂屋圖譜……宮尾しげを…(一七)
塵外居放談……煙亭記…(一八)
三つの會……內田三千三…(一九)
會報と消息……(二五)
太棹社彙報……(二七)
編輯後記……芳河士記
表紙・カット……齋藤清二郎
寫眞 乃村乃菊氏病氣全快祝賀會
神馬里芳氏の見棄披露

文樂座拾遺

西尾福三郎

本稿は文樂座掉尾の大阪興行を紹介すべきであるが、編輯の方の都合で年末號を休む事になるらしいので自然新年號の誌上に十一月の通信と、そして十二月の東京興行の記事が併載される事になる。それでは恒例の文樂通信も月を跨ぎその上歳を超して何うやら氣の抜けたものになつてしまひさうなので今回の所はざつと驅け足調で端折る事として、その前に昭和十六年度の總決算の意味で今日迄に書き洩らした二三の事柄を補遺しておきたい

その一は、十二月號の葛の葉子別れの評の中で肝腎の榮三の狐葛の葉の記事を逸した事だ。これはメモのノートにかいておいた分を何うかした拍子に失つたのを氣がつかず、後で原稿をかく際にそのまゝ失念してゐたもので、實をいふと久し振りで出た芦屋道滿大内鑑の面白かつたのは大隅の子別れの詰り口より、又新左衛門の絃より、何よりも榮三の狐葛の葉のよさが頂かつた力があつた事だけは何うあつても附記しておかねばならない。

その二は九月の名和長年の拙評に對し作者の西村紫紅氏より懇書を寄せられた事だ。それによると紫紅氏は大阪生えぬきの、しかも都心船場邊の商家育ちで父祖の時代から淨曲の中で大きくなつた人で、その後注意してゐると素人淨瑠璃の會では重要な地歩を占めて居る人で特に絃の重造と懇篤の間柄のやうに察せられる。新作名和長年は時間の關係でカットされた部分が多く、最小限一時間は何うしてもかゝるものを四十分二場に詰められてしまつた事が何と云つても致命傷であつた事、從つて詞曲倶にやまとすべき部分を割愛の止むなき結果となつた事を訴へて來られた。以上の次第を一寸附記して妄評の責を些か辨明しておく次第である。

さて霜月の文樂座であるが、粂仙、鳴戸、鎌腹、賢女鑑、紅葉狩、壺阪、と以上の六本建てゞ、これを通觀し

て全體のシンになる物が一つもない事が何よりの弱味だ作品の魅力か、或は太夫、三味線の藝力でもつてグッと惹きつけるものが一篇もない、何れをみても、きいてもまあ〳〵一と通りと云つた所で、まして二度三度と人を呼ぶだけの興味に値するものが殘念乍らなかつた。肝腎の古鞍の賢女鑑なるものが、要するに紋下になつてからでは持出せたものではないので今の間に發表しておきたい、と云つたやうな氣味のもので、この人の不斷の研究心は多とするが、この作品を今後如何程錬磨習熟してみた所で、到底二月堂程度にも專賣物とはなり得ない缺陷をこの作品は持つてゐる事を知らねばなるまい。一度は物珍らしさに興深く見聞したが、作品そのものゝあざとさが何うにも辛捧ならなかつた。たゞ榮三の春元がぢつとしてゐてその貫祿を充分に見せてゐた事を褒める外、古鞍折角の努力に對しては申上る何事もないのを甚だ遺憾に思ふ。清六の絃はよかつた。讀んでみ、きいてみて賢女鑑の宇治の方が一向に賢女でない事を感ずる許りであつた。近松柳全集の中に左小刀、三十石燈始、持丸長者金笄劍、太功記、後の太功記、鳴海高名硯、日吉丸稚櫻、同二度清書等の名と共に日本貞女鑑の一篇が出てゐて、これは明かに貞女鑑とあるが、この分の内容は知らぬが、むしろ賢女ではなく貞女の方が遙かに適當いわではなかろうか。

大隅の鏈腹は相當期待してゐたが結果は案外不出來で

つたと申さねばならない。何か調味料が一種か二種缺けたやうなスカみたいな後味であつて、暗愚ながら善人である野人の悲劇と云つた根本の觀念把握に失敗してゐるのではなからうか。いつもは出ない大石が最後に出てきて彌作の忠死を哀れんで土の列に入れると云ふ趣好も、この作がみすみす忠六のアナである事を感じさせて作の低調さをいよ〳〵證明してゐるやうで蛇足である。呂太夫との前後分担も、何れも津太夫によつて高揚されたこの新鑄の作品を手がけるに恰好の人だと思はれたのに結果は將に前記の如くである。

これに比すればむしろ切りの伊達相生による壺坂が平凡ながら前後むらのない點で一等の出來だつたかも知れない。伊達は勝平の絃に助けられたのか、それとも故土佐のけいこが身にしんでゐるのか、今迄の氣取り澤山な風が漸時影を潜して　この人としてはましな方であつた相生の寺の段は吉五郎の絃と相俟つて久し振りでこの人らしい味を出してゐた。いつも織太夫と半座を分け合つたやうな扱ひをされてゐるが、今度は寺の段を一人で受持つて精一杯に語つてゐる。早速十二月の東京へ持出した點を考へても、この場が相當な出來であつた事が首肯されやう。

他に蘆太夫廣助の鳴戸、七五三太夫綱造等の桑仙、春太夫南都太夫新吉衛門等の紅葉狩があるが、これは都合で批評を遠慮しておく。

親馬鹿の記

本山荻舟

曾てこんなことを聞いたことがある。

放送局に集る記者倶樂部の人々が、發表される番組を圍んで、義太夫は苦手だといつてゐた。ラジオ版の盛んな頃で、本文の丸どかしや、要所を抄錄して掲載するのに、見當がつかぬといつて困つてゐるのだ。たま〳〵行合せた知人が、どう困るのだと聞いたところ讀んで見てもさつぱりわからないといつたさうだ。要領がわからないのでなく、本文の意味が通じないらしいのには驚いたといつて、つく〳〵呆れ顏をした。

勿論院本の中には、難解の字句も多いけれど、それほどの意味ではなく、たゞ大づかみにわからぬとして片づけてしまふのだと思はれる。こんなのは例外かも知れぬが、そんなことから義太夫は、現代向きでないなどと、尻馬に乘る者の多いことは爭はれぬ。

またある時　文樂の中繼放送で、自分も聞きたく人にも聞かせたく、語り物を指定して勸めたことがあるわが家では無論家族と共に聽き、相當出來もよかつたと思つたので、次にその相手に會つた時、「どうだ聽いたか」と尋ねると、「うん聽いた」といふから、感想はどうだつたと訊いたところ「テムボののろいのに驚いたよ」と、それつきりでは張合がないから、こつちもそのまゝ默つてしまつた。

テムボの早いのが現代向きか、のろくては時代遲行か、そんなことを茲で論議するつもりはない。わたしの家では自分が好きだから、女房も聽き子供も聽く。子供は今年十五の女學生だが、小學校に入つた頃から

聽きはじめて、今も相當喜んで聞く。文京の上京する時は、少くとも一度は必ず聽き、たまには並木倶樂部などへも出懸け、ラジオに義太夫のある時は、忘れないでスキッチを入れる。

新しい音樂などにも、相應の興味はもつらしいが、あまりうるさくなるとスキッチを切る。箏曲は學校の科目にある故か、大低喜んで聽いてゐる。長唄、清元常磐津、そんなものは皆好むが、琵琶には殆んど興味がなく、浪華節の時間になると、大急ぎでスキッチを止める。以上は大體わたしの趣味だから、遺傳にも庭訓にもよるのだらうが、わたし自身としては、浪花節に對しても、演者と演目によつては、聽いてもよいと思ふことがあるのに、子供の方は絶對潔癖だ。

芝居の方も歌舞伎が好きで、新派や洋風じみたものには、一向行きたがらない。かう書き立てゝ見ると、親の頭が古いから、子まで古くなつたのだといつて、憐まれるかも知らぬけれど、當人はそれで滿足してゐるのだから、まあそれでもよからうと思つてゐる。私事ばかりを記して恐縮するが、こゝで問題にして欲しいのは、現代向とかさうでないとか、大衆性があるとかないとか、そんなことは末節で、必ずしも觀念的に規格さるべきでないといふことだ。わからぬといふのはわからうとしないからで、どんな難かしい藝術でも度々見てゐる中には、また聽いてゐる中には、或る程度までは自然とわかつて來るのが常である。さうしてゐる中に觀聽いてゐるものが、本統によいものかさうでないかも、自然にわかつて來ることはいふまでもない。

時代に合ふか合はないかよりも、本統によいか惡いかである。好きだからといつて、それでさへあればよいといふのではない。好きであればあるほど、多く觀聽する機會を求める。巧拙は好きでないものよりも比較的一層わかるのが當然である。同じことをいつてゐたのでは限りがない。端的にいふと藝術家は、理解のないものを相手にして、憤慨したり輕蔑したりする前に、少しでも理解のあるものから、憤慨されたり輕蔑されたりしないやうに、先づ戒心することが、何よりも肝要であることを强調したいのである。

勿論家の子供など、まだ何もわかるやうなものではないけれど、それでも親馬鹿が時によると、ウヽムといふやうな批評をすることがある。これ等を目標とすることが、本統の意味の時代即應ではないだらうか。

（昭和一六・一二・一七）

師走の演舞場文樂雜感

中山泰昌

愚劣な狂言の並べ方

演舞場は盆興行馬鹿當りの夢が忘れられかねたと見え師走の穴埋めに又も文樂を引越させたが、この思惑はマンマと外れた――それは、大增稅と突發的の重大時局といふ天災的の影響だ、と思ふのも間違ひなれば、最後の土曜日曜からラクの日にかけて滿員といふ尻ツ刎ねも、人氣が漸く落付いた爲だ、と思ふのも大間違ひ。それも多分の理由にはならうが、其の入不入の原因が演し物の並べ方如何に係つてゐることを知らねばならぬ。

先づ第一回を見る。第一が道行旅路の嫁入と本藏下邸其次に近江源氏と合邦といふ、肩の凝る長丁場ものを二つ並べて、追出しが鈴ケ森と來てゐる。之では大增稅と燈火管制が一時に押寄せた時局を鵜呑みに反射させたやうなもので、何といふ氣詰りな、何といふ陰慘なことか凝つては思案に能はず、玄人筋から見れば何れもヒニクなもの、惡い演し物ではあるまいが、斯ういふ並べ方をしては、お客は怖氣を振ふ。いくら文樂でも、東京では玄人ばかりがお客ではない、其のお客は六割の稅を覺悟で來るのである。である以上は、少しは甘いサービスもしなければならぬと思ふ。

十五年八月の明治座は、いつもの逆手を打つた、第一回に忠臣藏を通して客足をつけた。そして津、古戸なき一座で廿五日間滿員を續けた。其の餘韻は七月の演舞場にまで及んだが「鳴花女」の宣傳以來、折角良い辿り方をして來た文樂を、一時にぶちこはしたのは正しく此の第一回狂言の並べ方である。

第二回は、重の井、沼津、千本櫻、阿古屋。之は稍第一回に優つてはゐるが、七月に床と人形と三拍子揃つた傑作の重の井を出した、その味がまだ忘れられぬ所へ、格を一段下げて又も重の井とは。次いで沼津の次に、椎の木、小金吾打死、すしやと、又も重く來させてゐる。素人うけのする阿古屋で終りを賑かに搦つてはゐるが、まだいくらか客を增させたといふだけのこと。

第三回からはぐつと趣向を變へたお膳立をした。客うけも俄然よくなつた。第五回が最もよい。尻ツぱねで、ラクの日まで滿員になつたといふのは、必ずしも人氣が落ちついたからではない。併し其の五回目で、僅か十二三分のお七半鐘物を頭において、半數以上の客に其の尻も見させないといふのは愚策。戻橋を中幕にして、お七を追出しにすべきであらう。こゝにもお客そつちのけの

太夫本位の醜體を暴露してゐる。

斯く云へばとて、一にも二にもお客の御機嫌さへとれはよいといふのではない。唯文樂の興行價値を失はしむることは　松竹が文樂を獨占してゐる以上、松竹をして文樂虐待を敢てせしめることになるといふ實際問題から考ふるまでゞあつて、之については機を更めて少し云つて見たいと思ふから、こゝでは省略しておく。

新紋下と批評家とへの希望

今度の演舞場では、文五郎と紋十郎とに二役づつつけて、カッキリ二人を別け、若手の働き場を多くしたのはよい。太夫の方も今までと顏ぶれも大分變り、若手の語り物を多くしたのは大によい。が其の爲何だか全體が雜然として馴染まぬ感じがしたのは淋しかつた。それに新に語り場を得た若手中堅が、イヤに自分ばかりの大事をとつて、氣ばつたり、引つぱつたりで、人形との呼吸をそつちのけにしてゐる傾きのあるのは感心されない。

苟くも文樂の舞臺に乘つかつてゐる以上は、床は人形と妥協すべきである。人形の遣へない語り方をするのが好みであるなら、其の人は宜しく文樂を去るべしである。太夫や三味線は文樂を去つても立ち場はあるのである。窮屈な小屋に蹋踏してゐる必要はあるまい。此の點について　亡き津太夫は最もよく人形の呼吸を計つてゐた。土佐太夫も人形を遣ひよく語つた。併し其の津、土佐が自分ばかりでなく、此の三業一體の精神を、果して門下にまで叩き込んだかどうかは知らぬ。これについては、新たに紋下たる古靱太夫に、特に此の點について、一座を指導せられんことを希望する。紋下といふ稱號は、單なる力量技量の表彰ではなく、又太夫だけの棟梁たるべき稱號ではなく　太夫、三味、人形の三業を一體として率ゐるべき資格と責任との賦與を意味するものであると思ふが故に――從來は知らぬが　新たなる體制の下に於ては然かあるべしと思ふが故に、新紋下古靱太夫は、單に自家の門下ばかりでなく、太夫、三味の全部に三業一體の精神を吹込んで頂きたいと思ふ。

又いつも思ふことは、文樂の批評なるものに、太夫、三味、人形三者別々の批評はあるが、之を一體としての評は殆ど見られざるのみならず、殆ど多くは太夫の批評ばかりであることだ、人形は唯從いて來ればよいと思つてゐらるゝのであらうか。固より人形は、太夫の息が長からうが短かからうが、それに從いて行くより外に道はないが、それだけでよいならば、此の邪魔つけの人形は宜しく叩き潰して了ふがよい。

殊に文樂の批評に樂屋落ちの鼻持ちならぬものが、却つて若いインテリ階級に多いのは醜い。筆は自ら尊重すべきである。何等啓蒙の精神も、指導の精神もなく、自家出入の部屋だけを大事に稱へて、其の餘は、或は默殺或は罵倒、自由自在に魔刄を揮ふのは、自ら筆權を冒瀆するものであらう。

文樂人形小道具帖（五）

宮尾しげを

一の谷嫩軍記

大序

しとね　一枚
三寶　一ツ
鏡　一ツ
花生　一ツ
文箱　一ツ
卷狀　一通
制札　一本
短冊　一枚

序切

しとね　一枚
銚子　一ツ
盃　一ツ
文箱　一ツ
卷狀　一通
弓矢　一組
馬（白）　一匹
長薙　三本
やの仕掛　一ツ
捧太刀　四本

陣門

馬 白、黑、茶　三疋
弓矢　一組
捧太刀　四本
槍　四本
ほろ（赤黑）　二ツ
長薙　一本
小馬（白黑）　二疋
男きり首　一ツ
ひしごき　一本
仕掛扇　一本

一ッ家

みのかさ　一組
煙草盆　一ツ
ばちようがさ　一ツ
劍　一本
すつぽん　一ツ
茶碗　一ツ
風呂敷包　一ツ
鎧　一ツ
陣笠　一ツ
銚子盃　一組
四本道具　一式
十手　四本
捧太刀　四本
高張　二本
縛り繩　一本
櫻持杖　一本
短冊　一枚
黑馬　一疋
錦の袖　一ツ
をりかみ　一ツ

寶引

杖　一本
すきくわ　澤山
棒　一本
くぢ縄　澤山
横笛　一本

三段目

制札　一本
挾み箱　一ツ
杖笠　一組
大縛り縄　一本
經机　一式
煙草盆　一ツ
煙管　一本
横笛　一本
鎧仕掛　一ツ
鎧びつ　一ケ
首桶　一ケ
男切首　一ツ
石屋ののみ　一ツ

繪本太功記

序
しとね　一枚
大縛り縄　一本

鐵扇場

しとね　一枚
はい膳　一組

門前

女のりもの　一ツ

本能寺

三寶　一ツ
銚子　一ツ
盃　一ツ
しとね　一枚
雀　澤山
手燭　一ツ
長薙　一本
切首　澤山
赤旗　一本
棒太刀　四本
矢　澤山
槍　三本
四本道具　一式
たゝみ　二ツ
馬　一疋
さしもの　一式

妙心寺

しとね　一枚
脇そく　一ツ

さしもの
さしもの臺　一式
風呂敷包　一ツ
枝笠　一式
簞笥　一ケ
長持　一ケ
挾み箱　二ツ
手桶　一ケ
たらひ　一ケ
衝立　一ツ
硯箱　一ツ
馬　一疋

うりけん

ふこ　一ツ
棒仕掛　一本
竹槍　一本
棒太刀　四本
馬　一疋

尼ケ崎の段

夕顔生花　一ツ
床ぎ　一ツ
團扇　一本
じよれん　一ツ
井戸　一ケ
釣瓶　一ケ
手桶　一ケ

坊主笠　一ケ
風呂敷包　一ツ
手だらい　一ケ
みのかさ　一ツ
鎧びつ　三本
槍　一ツ
三寶かわらけ　一ツ
長柄の銚子　一本
竹槍　二本
矢　一ツ
竹槍先

五段目

みのかさ　一式
あかはた　一本
經机　一脚
けさ　二ツ
さし物　一式
はた　一ツ
ふばこ　一ツ
印籠　一ツ
旗竿　一ツ
弓矢　一本
長薙　一ツ
女切首　二ツ
蓮花　二ツ
手紙　一通
白臺　二ツ
みぎよう書　二ツ
白馬　一疋

佐渡ケ島に殘る郷土藝術

『文彌人形』に就いて

……文樂と文彌のこと……

伊藤紅二

「祖國に睹めよ」と云ふ聲が、國粹藝術保存、發見、再檢討となつて表はれ、地方の郷土藝術なども、今更の如く發堀され、新しいいきぶきをかけられてゐる時に、殊に我が古典藝術の王座を占めてゐると思はれて近事頓にもてはやされ、特に有識者間に珍重されてゐる太棹藝術と同巧異曲にして、しかも、其の源流は、或はそれよりは先のものではないかと思はれるこの「文彌節」並にその地によりて遺はれる「文彌人形」と、其の又文彌人形とは姉妹藝術の樣な關係にある「のろま人形」について是非とも知つて頂き度いと思ひ、以下貧しい研究乍ら同好の人の爲に書いて見ることゝなつた。

勿論、大した學的の根據はないのであるが、ともすれば文彌人形は或は、文樂の生みの親であるかも知れないと思ふので之もついでに知つておいてもらひ度いものである。

そして之が奇しくも、日本海の一孤島、佐渡が島に現に立派に殘つてゐるのだから益々面白いと云ふべきだ。

抑々、然らば其の文彌とは果して何か。

文彌淨瑠璃は元祿の頃、京都の人、岡本文彌氏の創作せるもので、其頃大阪道頓堀邊で人形を遣つて上演した處、大いに世人の喝采を博したものだと云ふ。其後佐渡に傳來したのは、何時の頃か、年代は詳ではないし、岡本の門派で　中原春正と云ふ人から傳へたものとの一說もあるが之とてもはつきりはしない。

唯、父老の口傳に依る佐渡の文彌節語りとしては駿河の市（眞野村竹田の人）常盤の市（澤根の人）阿波の市（赤泊村川茂の人）淡路の市、長門の市、富市、庄右衛門先生（加茂村平澤の人）等があり、人形遣としては、善右衛門人形、彌市人形、竹田人形、黑山人形等が有名であつたとのことである。又我々の知り得た文彌語りには、故人に若殿の市（河崎村大川、野城の人）聖龍寺の先生、入川の先生、深山靜香（澤根町の人）等があり、深山は殊に演技域に迄達してゐたとの事で、岡本文彌と改稱せしとかと記憶するが、今ではもう聞く由もないの

は遺憾である。中でも若殿の市などは、近郷を風靡させたもので、その語る所は、悲壯感憤、一座を感動せしめたとのこと、然し、不幸、三十三歳を一期として歿して居り、其の賻に接するや、其の門人格で共演者たりし夷町、祝次郎助、中田友吉、新穗の森なにがし等（何れも人形遣ひ）來會して慟哭せし有樣は今尙肝銘し、其の中には筆者の父などもまぢつてゐた樣である。此の一事でも若殿の市が若年にして如何に人望を得てゐた名人であつたかが察せられるのである。

人形遣には夷町の治郎助、久左衛門（前名中田友吉のこと）黑山人形、潟上人形、關人形等があることは既記した通り、現在の文彌語りとしては、關の中川閑樂があり若殿の市の後繼とすべき點多く、又、新穗村潟上には池田某があり、からくも餘命をつないでゐる最後の人達であるが、その三味線はとにかくとして、節としては、遠く閑樂師に及ばない樣である。夷町には岡本文治師が居たが之も文彌節の正流と云ふわけには行かなかつたとの評を聞いてゐる。

扨て、この人形の表情は何れも德川、享保年間の夢を見て居るものばかりで、どの座の人形も四十頭の男女が皆異つた表情をして居る所に、黃金花咲く島の、當時の藝術の深さが伺はれて得難いものばかりである。

其處で佐渡には有名の「文彌」と「のろま」と二つの人形があることに言及しよう。

即ち「文彌人形」といふのも「のろま人形」と云ふのも此處ではわざと同巧異曲のものとして取扱ひ、一番判りよくいふなら大阪の文樂人形に等しいものであると佐渡人は思つてゐる事を注意したい。本當は、其の發生は全然別のものであつて、このことは「月刊民藝」（昭和十六年十月號）に筆者の小考があるので御參照が望ましい。

然し「文彌」にしても「のろま」にしても、一人の人形は絕對に一人で扱つて、文樂の樣に一人の人形を三人四人がかりで扱ふといふことはないのである。從つて此の人形使ひは足を動かすといふ事はないのである。

總て顏と手のみを動かして足は殆んど眼中にないもの丶如くである。しかも此の人形の動作と共に語る處の文句は近松門左衛門等の文樂のそれと殆ど同じであるにか丶はらず其の節調は大いに異つてゐる。又三味線も淨瑠璃同樣太棹であり、語り手の聲の出し方も亦淨瑠璃と等しく乙の音を以て太い聲で語るのであるが其の節たるや筑前琵琶の如く、詩吟の如く　源氏節の如く、又浪花節の如く、所謂文彌節なるものである事が文樂とは其の趣を異にしてゐる譯である。

此の文彌人形は今より凡そ二百五十年前、靈元天皇の天和貞享の頃大いに流行したる處の淨瑠璃の一派であることは前述したのであるが、節廻しの平易なる割合には淨瑠璃を淩ぐの妙でもあり、其後二三十年は文彌節の全

盛時代であつたがそれから後は義太夫に壓倒されて殆ど絶えたのである。所が不思議に佐渡ケ島にのみは今、猶殘つてゐる古典的藝術の一種であるだけに珍重の價値がある。

野呂松と書いてのろまと讀ましてゐるのも此の文彌の別派で殆ど相等しいものであると佐渡島民の通念になつたのも無理はない。

矢張、此兩者とも何々太夫といふものがあつて盛に文彌節を語り、文句につれて、人形を踊らしむるもので、其の地は殆ど總てが匠松の時代ものである。世話ものもないではないけれども、大體に於て、時代もので、衣裳は極めて粗野にして到底文樂座などの樣に寫實一方に偏してゐる華々しいものとは比較すべくもないのであつてそこには野趣大いに掬すべきものがあり、捨て難い味があるのを鄉土藝術として誇りかに思ふ。

之は當時全國に擴がつたものであつたと言はれてゐたが、義太夫に壓倒されて、何れも影をひそめてしまつたにもかゝはらず、佐渡にのみ之が殘つてゐる事も不思議の事である。思ふに交通不便の爲、本島の盛衰には何かの關係もなく全く、超然たる立場にあつた事を認めずにはゐられないのである。

元來「ノロマ人形」と云へば、例の野呂松勘兵衛が紀海音の淨瑠璃を讀んで何か是を表現するものはないかと苦心の結果現れたもので、江戸の和泉太夫座に於て、それを開演、大いに喝采を博せしに始まる。（延寶年間の事）ノロマは即ち野呂松の略である事は云ふ迄もない。

佐渡のノロマ人形に就ては、眞野村誌に「寛保の頃、野呂松勘兵衛と云ふ人當國に來り、長石　四日市邊に住せしが、初めは瓜茄に目鼻をつけ、人形に擬して操り、後には松の木の瘤を切つて頭になせり。或時、竹田大膳學に天鋼目命の形を作り裝束を舞はせけるに、竹田の人某、之を見て大いに感じ、人形芝居を始む、之、竹田人形の濫觴なり」と書かれてある。

然しこれより先、享保年間、潟上村、梅ケ澤の佐渡能樂の太夫、本間家の先代が、加賀に渡り、實生家に於て能太夫となつて歸國し大いに賞讃さるゝや隣村の八五字村の五郎右衛門と云ふもの「自分が何か一つ研究して本間氏に負けじ」と、色々思案の末、ふと人形の事に思ひ及び、京都に出て、人形遣ひの技を習得するに至つた。當時公卿が、內職として人形を製作し、其の宣傳の手段として之を遣ふのには太夫と云ふ稱號を附與した由で、五郎右衛門も亦人形の太夫となつて歸國したのである。此頃京都、大阪の操芝居野呂松を元祖とする野呂間、鹿呂間と銘打つて、淨瑠璃段物の間狂言をなしたといふ事があるから、持歸つた人形は、公卿人形もあれば、間に出た野呂間もあつた事と思ふ。其の後、五郎右衛門何代かの後、新穗村北方の圍藏といふ者に傳へられ、今日に於ては、圍藏人形の元祖で尙、五郎右衛門より二三十年

を經て竹田村の小田三四郎なるもの又々京に出てこれ又太夫の稱號を得て歸國し、竹田人形なるものが始まつた恐らく眞野村誌の竹田の人、某がしはこの小田三四郎ではあるまいかと推測せらる。唯、右の野呂松勘兵衛と云ふは江戸に謳はれた野呂松とは別人なる事は、年代よりしても明かなことで、且、江戸の野呂松が佐渡に至つて始めて、茄子や、木のコブを創意して、人形を操つたと云ふ事も、容易に信ぜられぬ事である。それは兎に角、人形としては、竹田人形より北方人形の方がその發生に於て早いのである。

佐渡では、ノロマ人形といふ人は一人もなく普通、たゞ「ニンギョウ」と呼んで居る。之れに土地の名を冠して、北方人形、竹田人形、小木人形、澤根人形などと云ふ。これは時代と共に人形が賣り渡され各所に渡される結果である。

この滅び行く島の藝術を保存すべく、筆者など大童なのであるが、仲々、手がまはりかねてゐる中に、あの傳說を誇る人形が、一つ減り、二つ減りして、さては、大量に島外に持去られ、心なき人の手に渡りつゝあるのも情けない。

其の文彌の節だけでも、之は時間藝術であるから、其の最後の人と思はれる太夫がなくなれば、完全に滅んでしまふので、八方苦心をして、東京の音樂學校や其他、田邊尙雄氏、町田嘉章氏の奔走で、錄音の出來たことは喜ばしい限りであり、人形も、その道のすき者、畵伯西澤笛畝氏等によつて、其の人形玩具研究所に餘命を保つてゐることはせめてものなぐさめと思つてゐるのである

餘　錄

因みに「節」としては

○上語り……開幕の時。○大おろし。○靈泉。○かんをとし。○はづみ。○愁歎ぶし。○色音葉。○色つなぎ。○おくり三重。○中三重。○キョミ三重。○のり○かん留……終幕の時。

などのあるのも興味がもてる。

何れ音樂的分野の研究としてまとめてみようと考へてゐるが、人形の特殊動作にも、文樂に於ける女形のさわりの中でよく用ひられる最も印象的なポーズである「片手後ろ向き」の樣な人形獨特な美しい技巧に似たものや其の他「腕まくり」「三つさし」「六法」「打込み六法」「ギバ」等の最も初步的な原始的なものも間々見られるので、之についても興味が持てるのである。

何にしても夢多き島の藝術を再檢討しようと云ふ意慾で一杯である。

（筆者は鄉土藝術研究家）

藝界交遊錄

齋藤拳三

つきあひよい藝界人

物事に溺れやすい私は少年時代から、文學でも藝事でも可成、夢中になつて本業をおろそかにしがちだつた。二三十年もお道樂の永續きがするのは物事をどん底まで覗いて見たい愚しさからであらうが其の爲、色々の人との交遊も生じたが、趣味で結び付いた友人は一番しつくりと愛し合つてゐて嬉しい。

最近も或る醫學博士があまりに無沙汰が過ぎたので私の身體を案じて脚氣の藥を持つてわざ〳〵見舞に來てくれたのはしみ〴〵嬉しさが身にしみた。

私の貧しい體驗に依ると總じて物を書く人間には會はぬ方がいゝ、大抵幻滅を感じる人が多い。小說家でも評論家でも人間より書いた物の方が數段立派だからだ。特に小說家は性格の一部に「づるさ」「こすさ」が無いと此の方面の描寫が出來ないのであらう。其處へ行くと畫家の方が附き合ふといゝ人が多くつて面白い。畫家はいゝ繪を書く上に決して性格の惡さを必要としないからであらう。

なんと云つても一番會つて感心するのはいゝ藝人である。此れは此方が一寸藝人位と馬鹿にしてかかる爲かも知れないが、豫期した以上に人物もよくつて感心する事が多い。常に藝の善さに人間の善さが正比例して居るやうである。

然し歌舞伎役者だけは一寸例外である。正宗白鳥が團十郎の舞臺が非凡な割に人間が平凡だと云つて居たが全くそうである。總じて役者は世間知らずで話がつまらない。もつとも大名などの役になるには世間と沒交渉な生活が必要なので故松助などがあれだけの名人でありながら家老程度の役をしても何か身に附かぬ處のあつたのは風姿よりも家僕的生活が原因して居るらしい。

私の淺慮な經驗では一番附き合つて愉快なのは文樂座の太夫と噺家と講釋師である。其處へ行くと三味線彈は素人を稽古する關係か怜悧で太夫程無邪氣でない。友人で三宅周太郎は著書「文樂物語」の中で馬鹿に人形遣ひを仙人あつかひにして提灯を持つてゐるが、人形遣ひの仙骨は

遠く噺家に及ばない。

土佐太夫と古靭太夫

文樂の太夫では先日七十九歳の高齢で急逝した竹本土佐太夫と現總帥の豊竹古靱太夫が群を抜て面白い、人間も亦、全然利慾を度外視して、それは〳〵お話にならない程の忍苦の修業をして來た人だけあつて、實に立派に磨がかゝつて居る。性格は兩極端に相違してゐるが金錢に恬淡で斯道を何とかして盛り返そうとする情熱を持つてる處が共通して居る此方から的をはずさない質問さへすれば其の藝談は津々として盡きない

土佐太夫は繪も巧く、書も達筆で茶道も相當に究めて居る。特に感心なのは有望な太夫が有ればすぐ御贔負の岩崎家へ押しかけて補助を乞ふて何とかして斯道の復興を念願して居る。文樂座が薄給の爲同家から毎月相當の補助を數年間受けた人も數人ある、食事など共にしてもどつちが饗應して居るのか分らなくなつてなか〳〵面白い。松竹の專務井上伊三郎氏の豪壯な邸宅の二階を四室位獨占して妻君と二人で三ヶ月も滯在して居て筆者などが恐る〳〵面會に行くと平氣で女中に色々の用事を命じる處などは浮世離れがして居た。

土佐太夫の雄辯なのと反對に古靱太夫は實に寡默である。彼の粉濱仲之町の宅へいつて驚くのは玄關右側の一室が古本、院本一番附の添付帳といつた古淨瑠璃の參考書でギッシリ詰つて居て、整然たる一個の淨瑠璃圖書館をなして居る事である。古靱太夫は毎日門外不出で是れ等の古本珍本の讀破と整理に日を暮れてしまふらしい。此の淨瑠璃文献の藏書家はたまに外出すれず手當り次第に古番附や古本を値も聞かずに買ひ込んで來るので家計擔當の妻女は相當まごつかされるのである。えて此の種の藏書家研究家は貸し惜しみ見せ惜しみをするものだが古靱太夫に限り何でも心よく見せてくれて實に床しいと思ふ。現今の淨瑠璃文献の活字となつたものが可成多量に古靱太夫から出てゐるのは實に見のがせない功績であらう。

私が欲しがつたので一枚ほどりだらけになつて捜し出してくれた故三代目鶴澤清六の櫓太鼓のレコード等は彼が崇拜してゐた故人の三回忌の法要に丁寧にも裏面へ寫眞を入れて再製したものでなか〳〵珍品である

柳家小さん

落語家では現四代目柳家小さんが藝もよし人物も立派である。師匠の三代目柳家小さんが「いまに隱居すると此方から弟子達の家へ押かけて噺を教へてやる」と云ひ暮して居たが、いざ隱居した時はもう耄碌してどうにも仕方がなかつた。「私ども藝人は思ひたつた時すぐ實行しなければ永久に出來ません」と彼は月一回一門を自宅に集めて親切な教授をしてやつて居る。噺家に似ず俳句にも深い趣味を持ち厭がる弟子に無理に運座なぞをさせて居る。彼の持論

では「噺家は俳句に少しでも關心を持つだけで噺のマクラ（冒頭の小噺）なと本題との滑らか選擇が出來ますあれは丁度俳句の附け合ひの味ですから」と。

無邪氣な噺家の事だから「皆小遣ひがないから師匠の家へいつて運座でもやつて一パイ呑もうよ」などと押かけて來る。中には「内の師匠も運座さへやらないと好い人ですが」などと云出す、鈴々舎馬風の樣な强者もゐる。

金錢にも恬淡で家庭人としても善き常識者であるから彼は頭取にでもなれば案外に此の社會は幸福であらう。客の招宴などへ出たがらない點が一寸古靱太夫に似て居る。

こんな一笑話がある。

或る時彼が弟子達とさる小料理屋へ呑みにいつて。隣に居た醉客があまりに執拗に彼を二次會の待合へ連れて行きたがつたので、困つてる弟子達を見て彼は物靜かな高座の樣な口調で云つた「只今これの兄が死にまして實は葬式萬端の相談をして居ますので亦此の次に御願ひいたします」と丁寧に答へた。客も弟子達も啞然としたそうだ。こんな一寸藝人離れのした處がある。

神田伯治

講釋師では一昨年死んだ神田伯治が面白かつた。藝もよかつた。非常に神經質で皮肉な男だつたが錦城齋典山（今の一龍齊貞山の師匠）を崇拜して居て、典山愛好の私とはよく話が合つた。すぐに立腹する男で高座から客と喧嘩をして居るのを見かけた事も數回あつたが、無愛想で御記錄讀みの後齋である事を自負しながら時代の流れに取り殘されて行く講釋師の善良な一面をよく代表して居た一人であらう。

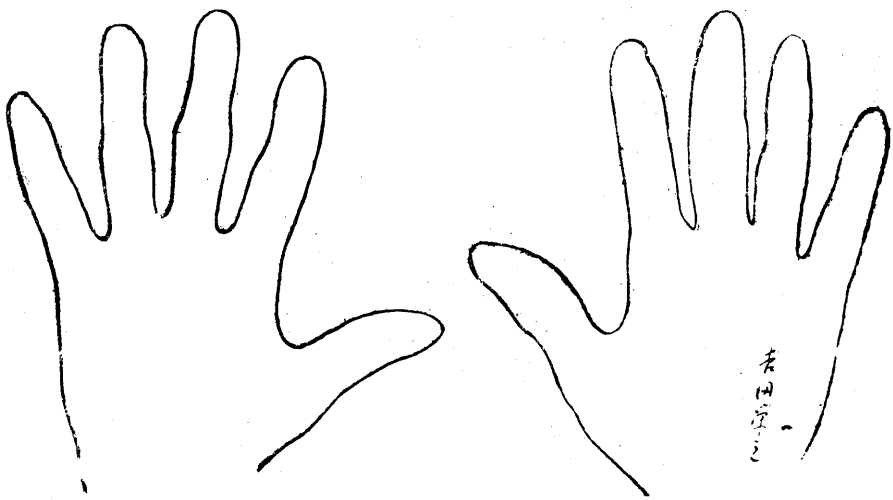
彼の說によると「古來の大人物は史實とは別に講談ではどうなつて居るかと云ふ事を講釋師は必ず知つてゐなければいけない」と壯語してる勉强家だつた。其藝風も本を讀む樣な同じ調子で講じて行く内に人物や情景を描寫しやうとする流儀で頑固に講談の傳統を死守しながら其の間に近代描寫を或る程度まで織り込まうとするのが理想だつた。伯治にはこんな思ひ出がある。

或る時私が八丁堀の開樂亭と云ふ講釋場へ彼を聞きに行くと犬を連れて來た一人のお客があつた。主人は熱心に聞いてるが木戸の外に待たされてる犬は寂しがつてシキリに吠へ立てるので高座の伯治は大層演り惡くそうで大不機嫌だつた。すると丁度高座のすぐ前に夫婦連れで猫を一匹連れて聽きに來たお客があつた。妻君の方は講談に趣味のない人らしく猫の頭ばかり撫でて居たが犬を連れて來たお客に苦情を云ふ口實のない彼は遂に緣もゆかりもない夫婦連れの客の方に破裂してしまつた「私の講釋は猫には分りません」とやつたので驚いたのは其のお客で奮然として歸つてしまつた。犬に怒らうとして遂に猫に怒つてしまつた彼を私は思ひ出して今でも吹き出さずには居られない。

甚だ取り止めのない事を、徵せるまま匆惶筆にして實をふさぐ。

文樂屋圖譜

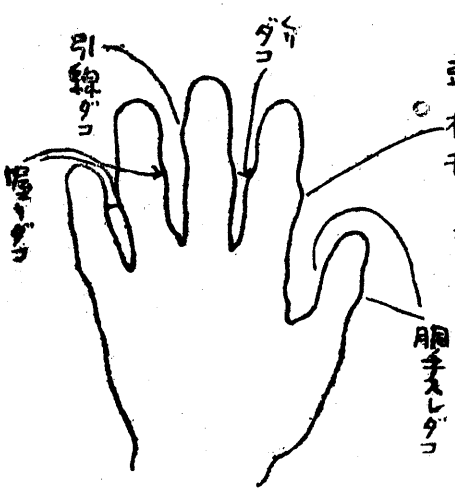
宮尾しげを



人形遣ひの手掌

人形遣ひは藝術的な仕事であるが、やつてゐる事は勞働者であると云つてゐる、あの人形を掌にもつてゐると、いつの間にか手掌の形が左右違つてくるものださうだ、座頭の榮三は昔は女形遣ひであつたが、今は立役遣ひになつたので重い人形を遣ふので左手は右手よりぐつと大きくなつてゐる、それを繪型をとつて見た。左右の指の形が普通人と違つてゐるのも、これではつきり見える。

文五郎の手も左が大きくなつてゐる、そして榮三と同じ樣にタコが出來てゐる。タコの出來てゐる圖を、かつて花柳章太郎氏が手型をとつて發表したので、それを借用して併せて發表する。



塵外居放談

煙亭記

松王か玄蕃か

＝やうやく打切りに＝

寺小屋の首實驗で「詮議に及ばぬ連れうしよ、と睨み付けられ」の人形、イヤ演出が、松王か玄蕃かの問題は、讀者諸君には、アゝうるせへな、と感ぜられるであらうほど、號を重ね、筆を替えての意見開陳であり、本誌前號には、本問題の張本人ともいふべき、安藤鶴夫君が、多年に亘る研究を頗る長文に發表されて煙亭老骨灰微塵、宛として香港攻略に於ける皇軍新鋭機の爆撃の如く、彼の頑冥なる英總督のやうに、多大の犧牲を省みず抵抗を續くる勇氣も無く、例年の通り宿痾漸く重く、褥中に苦惱する煙翁、白旗のやうなものを掲げて、此の問題打切りを宣言すべく、玆に悲壯？なる決意を致した次第である。岡田、齊藤、坂本等此の問題に關して意見を寄せ、太棹紙面を飾られた諸兄に對して、甚深なる謝意を表すると共に、唯だ何等研究らしき事もせず、常識と傳統？とによつて固守したる愚見は、尙ほ全体的に拋棄する能はず、安藤君が、誰れが何といつても、古靱氏の松王演出を尊敬するといふと同じく、老生は又た：頑然、アノ場合、舊來通り松王でなく、玄蕃のものであり、玄蕃の動きに任ておきたい、といふ信念を變ずる事なしに行きたいとおもふ事を、附加へて御悶察を願ふもの、未練と嗤ふて下さんすナ、である。

壽　戰　捷　新　年

柳有明	中島古平	紫野筑波

▼▼▼三つの會（續）▲▲▲

内田三千三

南北座（續）

宿屋（都太夫、辰六）都の「宿屋」は、味があつて舞臺が上ら上らない、たゞ淨瑠璃を抱き締めて語る、藝感は拂拭出來ないが作中の人物の一人一人へ情熱が浸透してゐる。一種の「都イズム」で表現する處に善惡兩樣の意味で芳烈な「藝の綾」がある如何にも小味で、情でエグる演出法が關東の世話物と云ふ感じがする人物中では駒澤が「なるい」品があつてよい。「キバ」らずサラツと運び乍ら情が籠つてゐる。惡く變に、「思ひ入れ」をしたり、無暗に二枚目がらぬのが、スツキリとした味を出す。殊に「思ひ掛なく……」の邊り切愁を「いぶ」して出す情味が直現的でなく「ユガ」かれた心境性がある。朝顔は潤愁を滲じませて、しつとり語るなんぞりとした「神門の

壽	戰	捷	新	年	祈	皇	軍	武	運	長	久
豐竹古靭太夫					竹本大隅太夫					竹本相生太夫	
豐竹呂太夫					竹本織太夫					竹本南部太夫	

娘」らしい清純さが望ましい箇處もあるが、當て込まず演るのが好感持てる。

岩代はガッシリと手強く描出する放り出す妙味と重ねてタタミ込む快味に淡く、キリリと纏まりすぎてゐる難はあるが、一通り以上だ。

辰六の絃は艶のある音色に美韻があるが睡そうな目元と倦るそうな姿勢が藝感を濁らす。火花する深熱と「カラリ」と變る滋味が欲しい。

人形は三國の「深雪」が大いに儲ける、器用な「ゴッ味」の少い使ひ方で、スムースに進行させるが、好漢餘りに絃に乘り過ぎて、いさゝか「踊る深雪」の感を覺えさせる。

琴唄の處は特に安定感に乏しく、人形が宙に浮いて雲上で琴を彈く圖になつた。それと駒澤の袴と岩代の羽織が同色の絲なのには驚かされた善を象徴する駒澤の優美な着付と、悪を鮮現する岩代の強靱な着付が對立してこそ始めて人形芝居獨得の單純にして豊かな色彩感が富麗に醸し

壽	戰	捷	新	年	祈	皇	軍	武	運	長	久
竹本伊達太夫			竹本長尾太夫					竹本七五三太夫			
竹本雛太夫			出征中 竹本濱太夫					豊竹司太夫			

出されるのである。

その代り大井川の黑いバックに浮え〳〵と滴る如き綠の柳は象徵的な暗示性があつてなまじ安手な書割より遙かに効果的で餘韻を生んだ。

新口（浪花太夫、猿平）都の「宿屋」は江戸前な世話物だが、浪花の「梅忠」は大阪の眞世話物と云ふ感じを濃く出す其の意味で五日目では此の二人の世話物が興趣の中樞となつた。浪花はサラ〳〵と屈託なく語り乍ら、演出が平板に流れず、滴々なる情韻を釀し出す豊かな技巧の熟出と壺に嵌つた老巧さが愼密で技巧の爲めの技巧に終らぬのが好い。サラッとした表現の裡に情の含くみがあつて腹こそウスいが、油切つたいやらしさが無い。孫右衛門を精緻に語る。索朴な老百姓の感じより物判りのいゝ洒脫な隱居を想はせる難はあるが……知つて知らぬ振りする、「情」の使ひ分けや浮世の義理に胸焦がす老愁にッンだ巧味がある。「覺悟極めて」がモタつかず鋭巧で

壽戰捷新年	祈皇軍武運長久
豊澤廣助	鶴澤清六
野澤吉五郎	野澤勝平
	鶴澤寛治郎
	鶴澤重造

妙熟してゐる。それと梅川が孫右衛門の老影を見つめる處が面白い。此處は大低「ヒエイーあのもじの肩衣が……」と感動的に表現する傑藝の人が語ると、コミ上げる感動の中に哀艶な慕情をモリ上げて心線を深彈する。

浪花のは半ば放心した樣に「エエーエエー……」とやわらかく出る如何にも雪中の孫右衛門を見つめ乍ら未だ見ぬ夫親への思慕を遊女的ないじらしさで出すエグられるやうな哀感はないが「なだら」かな詩愁が漂ふ。

忠兵衛はネバつかず「ヤつし」の味があつて惡くない。

猿平の絃は含蓄と古味があつて行き屆いてゐる、地味乍らじゆつくり艶を出す絃技が世話物のコツに觸れる、當夜第一の秀絃であつた。

人形は國五郎が他を引き離して達者に使ふが段切れで雪を降らせないのは間が拔ける、日中に電燈を仰ぎ見るに似て印象が稀薄だ、あの幕切れは是非降り積る雪中に嗚咽する圖であり度い。忠兵衛夫婦を心中に出す孫右衛門の心は吹雪の闇に埋づもれて行くのである。

布四（彌國太夫、絃平）この一段では達者だが、單調な彌國といさゝか衒氣が強く出る絃平のコンビより珍らしく立役へ廻る三國の「松波檢校」が意外に良い。率直に云ふと私はこの人を失禮乍ら見直した。これ迄見た三國氏の女形は「器用とは思つても良い哺！」と考へたことは一度も無かつた、無器用でもいゝモットじつくり大地に藝心をつけて「形から心」へ深く喰ひ入つて貰ひ度いと痛感させられて來た。人形演出上

壽戰勝新年

野澤喜代之助　桐竹紋十郎

竹澤團六　桐竹門造　乙女文樂

の樣式美は勿論大切である。この藝術の持つ象徴性と繪畫性の尊さは克く分る、しかしそれには飽く迄も魂が通はなくてはならぬ。

三國氏の女形はこれまで一種のマンネリズムに陷ちてゐた、人形の操作が單なる器用さのみで解決され得るとしたら、人形芝居は愚烈な見世物に過ぎ無い。それがこの行綱では「頭腦」や「器用」さで皮想的に片付けずに眞摯に役の性根と四つに取り組もうとしてゐる、沈然たる靜脈の中に烈々と沸騰する氣魄を藏する演出が核心に觸れて心を打つ、品を崩づさず雄格に敢闘する藝面に新らしき魅力を感じた。

津太龍會

大阪から東京へ……轉住した竹本東司改津太龍の披露公演を丸の内中央會館に聽く。

湊町（土佐廣、綱助）しつとりと情密な良き演出である。流麗なキメの細かさの中に、濃淡の交錯が「世話物の詩」をクッキリ浮彫にする。煽情的な嫌らしさが無く、土佐風のなめらかな潤愁を描き出す腕が流石にツンでゐる。「丸一月を泣き暮し」……で醸し出す切々の憂愁なぞ香り高く哀れな戀情を迫らせる餘韻を持つ。只惜しいことに復活後のこの人はどこか藝が寢てゐる處がある。全體としては潤軟密美でユガかれて居るが目の醒めるやうな素晴らしい箇處が一二箇處あり度い。

柳（東朝、三平）久々で三平が彈いた。古風な明治調の中に凛然たる氣魄が內有されて居て藝線も亂衰してゐない。勝八と清一を合はせた如き藝感に一寸心を曳かれる。東朝は和田四郎を中心に語るかと豫想したが直ぐ「木遣り音頭」へ飛んだ。一見無造作に語り棄て乍ら、緩急高低が的確な爲、情韻がグート豊かに迫る、技巧主義的な小細工を弄さず幅と深さを持つ雄潤な藝味が異彩を放つ。殊に「母の柳を……」で一瞬漂はす寂愁なぞ慈味深い。それと「和歌の浦には……」を陽氣に華麗に運んで「むざんなるかな……」の以下を愁然カラリと變る行き方も深良である。

野崎（津太龍、清一）故津太夫風のじつくりと間を持たせて重厚に表出しやうとする藝面がかへつて時に鈍重さを誘致して、表現力を減殺させる。總じてサラリとした詩味に乏しい、太く濁みて割り切れない藝感が、演目に依ると役立つが「野崎」の場合は、お光の清澄な諦めや、お染の炎戀を描寫するにギャップを生む。久作も稍モタつき淳厚に迫る情懷が今一息だ。場馴れた自信と太い線で從容と一段を進行させる藝力は矢張り大阪藝だと想はせるが情韻の液動と曲節の詩趣が渾出されない。清一は巧くまずして段切れの哀感を練描した熟した技力である。

太十（掛合）ここでも東朝の操が光る、放膽愼密な藝格が犇々と深感を衝く、ウスベラな情感主義を一掬して、秀深に渾描する聲量の豊富さ

と腹の強さが緊密に渾一して高潮させる「戰さの……」をのめるやうに小淺く振り廻さず深韻脈々と練巧に出るのと、「現在母御を手にかけて……」が上辷らず深愁耽々と流露させる。

猿春の初菊は多少「イカ」つくはあるまいかと豫感したが、メリハリの正しい表現で可憐な戀愁を漲らせた「聞く初菊も…」が一寸生地が出たのと「泣く〳〵取り出す緋縅の…」が强線過ぎるが、「情けない…」のネバつかぬ好さと「どう急がるゝものぞいの…」に劃然情韻が滲じんで、艶と品のある良い初菊である。

越駒の光秀は珍らしく大熱演で藝の幅廣さを覗かせた、「引ッそぎ槍…」を十分エグつて烈現するのは好らが、その前の「心は矢竹藪垣……」を突込んでエグる爲、重復感を生じて後者が引立たぬ。

佳照の操は、特有のネバリで巧妙に破綻がなく演るが、この日は何故か妙に器用さの方が耳立つた。

壽戰捷新年
波多野三樂

壽戰捷新年
貸席 並木倶樂部
淺草・雷門
電話淺草一二三五番

御禮

東京第一陸軍病院 太棹第百三十二號五十冊
東京第三陸軍病院 同 三十冊

寄贈者 齋藤山生氏

右弊社の趣旨に贊同せられ傷病將士慰安として御寄贈被下候段奉深謝候

太棹社

會報

消息

戰勝祝賀淨曲公演會

徳永靜翠

古來我が國の淨曲は、悉く義理人情をその骨子として綴られたものである事は皆様も御承知のことで、之を堅い言葉で申せば、孰れの淨曲も仁義忠孝禮智信の本義をその經とし緯として作られて居りますので 今日大いに日本精神を昂揚しなければならぬ此の時局下に於きまして、この淨曲を語つて宣傳することは、敢て私共が淨曲を樂しむと謂ふばかりでなく、日本精神を昂揚し鼓舞する意味ともなると存じます。

一月二日四日奥湯河原於山翠樓演藝場。（初日）寺小屋（銀水一合邦（素水）沼津（三幸）鮨屋（竹史）吃又（靜翠）布四（彌國太夫）絃（扇之助）……（二日目）先代（銀水）太十（素水）忠四（三幸）赤垣（靜翠）合邦（竹史）逆櫓（彌國太夫）絃（扇之助）

湯河原より

岡田蝶花形

一月二日家族一同を連れて現在囑託の東京遞信局が三十萬圓で建てた溫泉宿たる保養所へ來ました。そのついでに午後齋藤山生氏を訪ひました。これから熱海の富士屋へ。

齋藤山生氏を訪ふ三首

南湯ヶ原溫泉を引き清雅なる別莊風の住居よろしも

おちこちに黄色の蜜柑咲く見えて君の住居も黄金色浮ぶ

筒井筒友の富有をまのあたり見てうれしくも湯の町あるく

（同氏とは泰明小學校同級）

義太夫翼會

豐澤猿藏

十二月六日正午並木倶樂部に翼會を開催しましたが、早く通信を致さうと思ひ乍ら遲れてすみませんでした。正午に既に滿員となりました。

壽式三番（松四郎、延左衞門、美之助）廿四孝（大嘉津、猿藏、琴、ツレ松四郎）堀川（山門、猿藏、ツレ延左衞門）松王屋敷（白猿、猿藏）壺坂（三由、猿藏、ツレ美之助）

三好會

森三好

太原市派遣軍同仁會事務長森蘇水氏休暇帰郷に付春日町大國に於て歡迎會を催し去月二十六日午後六時より同樓に於て數段語り久し振りに內地の義太夫溫習會を以て慰安せり。なほ一月三十一日菊川倶樂部に於て午後六時より新年會を催し左の如く語る事に決定せり。

鳴戸（喜三香）寺子屋（津滿子）柳（巴好）三味線（三好、津滿子）

尙三好會津滿子吹込レコードは多量複寫入荷し在郷中指導御連中に贈る筈。

竹澤一座

小樽にて　竹澤亀次郎

御無沙汰致しました御變りもありませんか。目下身振劇にて十月中旬より當地方面映畫アトラクションに依頼をうけて出演してゐます。正月より仙臺市國分町歌舞伎に於て一ケ月の長期興行であります。

坂東勝治劇

新潟にて　魁家廣丸

只今新潟縣、佐渡、富山縣各地を巡業致しをり候、越後は貴殿御生國の由なつかしき事に候、なほ御陰樣にて縣下至る處大好評を博しをり、いづれ歸京の上萬々申述く候（一月五日）

東都聲義會

聲義會はこれまでの會を解散し改めて大日本淨曲協會聲義會を組織し幹部の初會を一月廿六日午後三時より神樂坂の相互倶樂部に於て開催。

素玄淨曲研究會

一月廿七日午後六時より神田錦橋閣にて第四十一回を開催。大原幽學（蝶花形、絃平）阿古屋（彌生、辰六）寺子屋（竹史、清吉）長局（壽飄、綾秀）忠九（重子、勝八）

女義若女會

（第卅七回一月一日）橋本（文昇）辨慶（佳世子、素一）野崎（素次、駒登久）先代（素八、播磨一）合邦（東朝、三平）……（第卅八回同十五日）沼津（素八、播磨一）太十（素次、素八）紙屋（住若、清一）寺子屋（彌周、三生）鳴門（染登、猿幸）以上東橋亭にて。

竹本米翁師

竹本米翁師の引越し癖は有名なもので、淺草から砂町あたりへ飛び、舊臘又、新富町三ノ九へ轉居、これで四十八回目の由。

文五郎、紋十郎の献金

昨年十一月の軍人會館興行に出演した吉田文五郎　桐竹紋十郎は、其の收入の一部を割き「朝日」扱ひの軍用機献納資金へ金貳百圓を寄附した。

當座帖

◇小鹽　潮氏　葛飾區柴又町二丁目一三九番地へ轉居。

◇豊澤兵吉師　横濱市中區相生町五丁目九三番地へ轉居。

◇鶴澤親西翁　舊臘風邪にて高熱肺炎となる怖れあり直ちにに入院、目下療養中。

訃報

荒木歳子さん　荒木泉氏三女歳子さんは病氣入院中の處十二月廿九日午後八時永眠、一月十七日午後二時より自宅にて告別式執行。

太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報道致します。開催前月に詳報したるものは開催後の記事を略します。時種の催はしの外前書きを略します。番組御送付なきもの、或は御通信なき會は記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。（太棹社）

初春の文樂座人形淨瑠璃

豊竹古靱太夫櫓下を襲ふ

既報豊竹古靱太夫は初春興行四つ橋文樂座に於て櫓下を襲ひ、熊谷陣屋を語つて未曾有の大入滿員を極めた。本社は今夏文樂座東上を機に新櫓下を迎ひこれが記念號を編輯したいと思ふので、今回は左に一月の番組のみを記載する事にした。

御所櫻堀川夜討＝辨慶上使の段（辨慶、七五三太夫）（しのぶ、卿の君、常子太夫。宮太夫。越名太夫）（太郎、富太夫。千駒太夫）（花の井　三瀧太夫。叶美太夫）（おわさ源太夫。雛太夫）（綱造）

明烏六花曙＝山名屋の段（前、伊達太夫、勝平）（後、相生太夫、吉五郎、胡弓、吉藏）

新曲末廣加利（紫紅山人作、鶴澤重造作曲）＝（太郎冠者、住太夫）（傘賣、相生太夫、織太夫）（大名源太夫、つぱめ太夫）（ツレ、呂賀太夫）（富太夫、千駒太夫）（喜代之助）（團六、鶴太郎、新太郎、友十郎、團作）引抜き壽夫婦春駒（和泉太夫）（呂太夫、伊達太夫）＝三瀧太夫、叶美太夫）（さの太夫、宮太夫、越名太夫、伊勢太夫）（叶）（勝平、友衛門、八造、友花、友三郎、仙三郎、一郎右衛門）

一の谷嫩軍記＝熊谷陣屋の段（中大隅太夫、清二郎）（切、古靱太夫清六）

天綱島時雨炬燵＝紙屋内の段（前、呂太夫、仙糸）（後、織太夫團六）

義經千本櫻＝道行初音旅（靜御前重太夫）（ツレ、雛太夫、播路太夫隅若太夫、松島太夫、長尾太夫）（新左衛門）（廣助）（綱造、友平）（猿二郎、叶太郎）（友作、友太郎）（德若、仙松）（忠信、住太夫）（ツレ、喜代之助、團伊三、吉季）

人形配役＝太郎冠者、熊谷、治兵衛（榮三）お辰、相模、おさん（文五郎）彦六、彌陀六（玉藏）おかや、義經（政龜）大名、五左衛門（門造）勘兵衛、太郎兵衛（玉市）藤の局（小兵吉）軍次、忠信（玉幸）

時次郎、女春駒（榮三郎）おわさ、傘賓（光之助）太郎　景高（玉德）卿の君、みどり（門次）花の井（紋太郎）しのぶ、三五郎（紋司）辨慶

男春駒（文作）お末（紋之助）勘太郎（小紋）善六（多三郎）浦里、小春　靜（紋十郎）

陸海軍献金　因會女子部大會

日本義太夫因會女子部は理事長竹本素女、顧問鶴澤清一、會計理事竹本佳照、豊竹若好等を始め理事會に於て陸海軍献金興行を開催する事に決定し、一月廿三日午後一時より日本橋倶樂部にてこれが大會を催ほし會場、樂屋、其他總經費凡て因會女子部の積立金より支出し、當日の收入より税金を引いて全額を献金　皇軍の赫々たる戰捷に感謝をした。當日の番組左の通り。

（第一部）車引（佳仙、佳世子、駒榮、三勝、仙照）樓門（素女）儀作（和佐之助、猿又）湊町（染登、猿幸）壷坂澤市内（素昇、土佐廣、綱助）先代（雷馨、雷糸）安達（越駒、團光）白石（綾千代、清司、猿玉）二つ玉（小和光、清三）岸姫（昇登、綱助）七段目（綾清、素次素八、駒登久）

（第二部）松王邸（駒龍、津賀昇）葛の葉（小津賀、紋敎）太十（重子勝八）柳（越道、巴佳）五斗（團蝶猿幸）壷坂寺（佳照、佳若、清一）長局（彌周、三生）鮨屋（東朝、仙玉）吃又（猿春、三生、津賀昇）新曲連獅子（佳照、佳世子、越駒、素次、住若。清一、清二、清三、津賀昇、素八）

湯淺光玉氏五十義會大關昇進記念義太夫會

第卅五回東都五十義會に於て西大關の榮譽を擔つた湯淺光玉氏を祝ふ記念義太夫會は舊臘十五日並木倶樂部にて午後二時より賑々しく催ほされた。

本下（伴左衛門、佳仙。本藏、三勝。三千歳姫、佳世子）絃（政子）寺子屋（一昇）合邦（一廣）柳（佳世子）辨慶（柳光）玉三（愛氷）中將姫（淺路）日吉（喜照）白石（枝蝶）太十（六花）志渡寺（乃菊）山名屋（光玉）帶屋（清）七段目（由良之助、光玉。おかる、都昇。平右衛門、柳光。力彌、愛氷。重太郎、一昇。彌五郎、一廣。喜多八、淺路）絃（佳照會女流連）

中老會

中老會は一月十九日午後四時より忠四（いろは、團市）帶屋（松玉、

左記番組に依り並木倶樂部に於て開催。今回より水野昇氏が入會　松岡茂里雄、井上巽、緒方千晴の三氏は今回都合上休演し、廣瀬いろは氏が客分として出演。

酒屋（春和、絃内）近八（昇、猿平）河庄（あるを、彌之助）太十（奇聲、和歌吉）忠三（盛鶴、絃平）忠四（いろは、團市）帶屋（松玉絃平）陣屋（操、道之助）紙治（越巴、和歌吉）七段目（由良之助、あるを。重太郎、呑笑。彌五郎、文盛喜多八、都。おかる、操。力彌、絃吾。平右衛門、春和）（絃平）

なほ今回星野桔梗氏が正會員として入會し、三四月頃大會開催の豫定

大日本素人淨瑠璃會

大阪大日本素人淨瑠璃會の第十二回競演大會は既報の通り竹本住太夫竹本大隅太夫、鶴澤叶、野澤吉彌、竹澤團友、伊東柳平、吾孫子檜、笹村ふんどの七氏審査の下に昨冬十一月廿四日より五日間に亘り文樂座に於て開催されたが、審査の結果は左の通り、なほ東京よりは保谷紅司、廣瀬いろは、米澤雅樂の三氏に横濱の田島集樂氏が出演。

三回連續東大關獲得により無審査（利生）一八四、九（金聲）一八四、七（生樂）一八二、〇（信濃）一八〇二（和十）一七九、九（重司）一七二二（タツミ）一六九、八（津の子）一六五、八（貴道）一六五、六（鶴笑）一六二、二（登一）一六〇、六（鶴峰）一五九、一（紫幸）一五六、四（榮四）一五五、七（うろこ）一五五、六（紅司）一五五、二（松鳳）一五四、九（三樂）一五四、〇（小富士）一五〇、五（里昇）一四七、四（あしべ）一四七、〇（光友）一四六、〇（素呂璃）一四五、六（きく水）一四三、二（登鶴）一四三、〇（まつ尾）一四二、八（幸遊）一四一、三（一蝶）一四〇、九（華遊）一四〇、八（五勢）一三八、八（小花住）一三八、六（得谷）一三八、三（長登）一三七、三（十九壽）一三六、八（藤政）一三六、六（呂鳳）一三六、一（金鳳）一三六、〇（榮糸）一三五、九（鳳玉）一三五、八（淡路）一三四、八（小昇）一三四、三（大和）一三四、一（千司）一三三、八（アリオ）一三三、六（長生）一三三、〇（松呂）一三二、五（大彌）一三二、〇（泉）一三一、七（晴山）一三一、五（鳴門）一三一、三（東升）一三一、〇（達竹）一三〇、八（ナゴン）一三〇、一（やなぎ）一二八、八（盛之）一二八、六（吳山）一二七、九（和鳳）一二七、八（華峰）一二七、三（表具）一二六、五（金花）一二六、五（透昇）一二六、五（初音）一二五、五（二木）一二五、四（雅樂）一二五、〇（山玉）一二三、四（花昇）一二三、二（昇）一二二、八（千歳）一二二、四（敷島）一二二、三（河桝）一二二、一（榮鳳）一二二、〇（はじめ）一二一、九（貴雀）一二一、八（老若）一二一、一

（小三島）一二〇、〇（米友）一一九六（古城）一一八、八（小里昇）一一八、六（都廣）一一八、五（芳玉）一一八、五（暫）一一八、五（花月）一一八、三（鳳）一一八、三（錦司）一一七、六（みはらし）一一七、一（一島）一一六、九（柳司）一一六、〇（幸長）一一五、一（いろは）一一五、〇（左文字）一一四、四（秋樂）一一四三（光鳳）一一四、一（東和）一一三、九（美よし）一一三、九（喜昇）一一三、五（古蝶）一一一、〇（無節）一一〇、五（紫保）一〇九、八（昭十）一〇九、八（まる一）一〇九、三（舟樂）一〇八、二（集樂）一〇八、二（春洋）一〇八、一（臥笑）一〇八、〇（一港）一〇八、〇（都）一〇七三（つばめ）一〇七、〇（竹司）一〇五、四（可祝）一〇五、二（京彌）一〇五、〇（米鳳）一〇四、四（呂角）一〇三、八（花昇）一〇三、〇（吉乃）一〇二、二（日石）一〇一、九（鬼外）一〇一、一（南木）九九、六（都號）九七、九（貫昇）九六、九（竹峰）九五、九（白鳳）九五、六（富玉）九五〇（東關）九三、五（寅嘯）九〇、三（紅雀）八九、〇（清司）

三役賞＝（東）大關（金聲）關脇（信濃）小結（重司）……（西）大關（生樂）關脇（和十）小結（タツミ）

優賞＝一等（小花住）二等（鬼外）三等（透昇）四等（都號）五等（日石）六等（榮鳳）

團體賞＝豊澤廣助會（三回連續）

松葉家音譜『節と手順』發賣

松葉家音譜普及會では今日まで數十種の音譜を發行し斯界に益する事甚大、今回松葉家は「節と手順」を吹込み、東風と西風、世話物と時代物等極めて纖細に說明し斯道の伴侶として發賣した。

同音譜は上中下の三種に分ち、五枚一組として函付（上）拾貳圓（中下）各拾五圓（稅共）である。

文樂人形遣奬勵會の發途

吉田文五郎、桐竹紋十郎後援會の中山泰昌氏は、文五郎、紋十郎と共に文樂人形遣奬勵會の設立を主唱し昨年十一月軍人會館に於ける興行も夫れへの寄與の一端であつたが、今回多少の積立も出來たので、不取敢出征中の人形遣吉田文二郎、吉田文枝、桐竹紋昇、吉田玉男、吉田玉司の五君に慰問金を贈り、又新橋演舞場へ出演中の吉田多三郎が不慮の災禍で負傷入院したので、同君にも見舞金を贈つたと。

社告

東都聲義會、東都女義後援會より番組、的野關路氏より御通信に接しましたが、校了後で右いづれも次號にまはしました。外に互調會と淨聲會の合同大會、德島縣人會等が開催されましたが、番組未着の爲め詳細不明にて殘念乍ら彙報に洩れました

後援 本誌 名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀬いろは氏　水戸部いづみ氏　木村一司氏　鈴木一信氏　高瀬一昇氏　荒木泉氏　宮原以子氏　吉川補氏　櫻井一氏　阿部光氏　橋本月氏　菅田笑氏　中村猿氏　田和斗氏　本白春氏　佐藤助氏　北島平之氏　和田梅氏　中澤巴氏　安藤ろく氏　安藤どく氏　吉田盛氏　小川竹氏　安藤平氏　安藤昇氏　平野氏　大熊氏

國友東氏　高橋好氏　保々光氏　緒方氏　栗原氏　久米氏　岸本氏　松千氏　神里氏　岡竹氏　林中氏　金林氏　本馬氏　本木氏　鈴木氏　林和氏　青山和氏　飛石かなめ氏　藤氏　加藤氏　高橋可氏　西田可氏　黒川松氏　米澤遊氏　岩崎がん兒氏　大用大嘉津氏

東光氏　東平氏　長晴氏　千鶴氏　千次氏　千史氏　中鳥氏　竹芳氏　林光氏　里昇氏　柳里氏　林松氏　大熊氏　和樂氏　和勢氏　和曉氏　大樂氏　里雅氏　林叶氏

小森口氏　田口氏　井上氏　小林太二氏　田本辰氏　森山高團氏　口倉素氏　子素氏　太月氏　武美氏　本鳳氏　口遊氏　子橘氏　太尾氏　川壽氏　上八氏　叶巽氏　辰壽氏　昇壽氏　昇氏

杉野氏　坂井氏　新井氏　川新氏　宮萩氏　小乃氏　水中氏　中石氏　石本氏　本山氏　山岡氏　岡篠氏　福松氏　長川氏　上鈴氏　安原氏

根本氏　藏寺氏　ぼ前氏　潮菊氏　原塩氏　う氏　つ乃氏　村野氏　野川氏　川城氏　下田氏　田倉氏　倉中氏　中林氏　林福氏　又山氏　彌彌氏　冠華氏　吳氏　文兒氏　光樂氏　巴氏　雀盛氏　樂氏　久樂氏　笑氏　絲氏　門氏　聲氏　生氏　之氏　笑氏　羽氏　昇氏　菊氏　潮氏　ぼ氏　藏氏　郎氏　美氏　鳳氏　遊氏　橘氏　尾氏　壽氏　八氏　巽氏　壽氏　昇氏　田氏　藤氏　木氏　越氏

月氏　玉氏　司氏　平氏　口氏　六氏　樂氏　昇氏　幹氏　葵氏　旭氏　明氏　氷氏　路氏　路氏　淡氏　愛氏　有氏　川氏　牧氏　山氏　本氏　ある氏　を氏　玉氏　幸氏　三氏　三氏　岡氏　村氏　さか氏　三氏　生氏　え氏　榮氏　司氏　壽氏　清氏　鳳氏　松氏　聲氏　氏

樂氏　藏氏　前氏　寺氏　鐵氏　天氏　永氏　圓氏　五氏　古氏　紅氏　光氏　湖氏　語氏　國氏　原氏　崎氏　田氏　島氏　谷氏　淺氏　中氏　岡氏　野氏　桑氏　岡氏　中氏　小氏　保氏　湯氏　田氏　松氏　河氏　寶氏　堂氏　大氏　及氏　柳氏　中氏　藤氏　影氏　坂氏　奥氏　寺氏　木氏　齋氏　平氏　橋氏　藤氏　細氏　藤氏　金氏　錦氏　奇氏　桔氏　梗氏　聲氏　松氏　鳳氏　清氏　壽氏　司氏　榮氏　生氏　え氏　榮氏　司氏　玉氏　月氏　松氏　聲氏　氏

日野金泉氏　野島貴昇氏　岡本國世氏　歸山歸世氏　平井外花氏　橋本月軌氏　乾桔梗氏　增田喜城氏　增田香氏　三浦鏡扇氏　和田金角氏　澤部其氏　岩木義雀氏　吉良蟻若氏　山田義昇氏　三並義昌氏　吉坂玉鳳氏　保坂末曲氏　岩田有成氏　高瀨田操氏　吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　北村三葵氏　池田三國氏　吉田三芳氏　村上美豆氏　須田美義氏　鈴木松寶氏　小原松樂氏

伊藤松鶴氏　菊地秋花氏　亀田月氏　花山房紫蝶氏　田倉田壽瓢氏　田口司重氏　濱打司樂氏　西矢秋華氏　永內晶水氏　高野昭平氏　武瀨神晶氏　高笠一風氏　福山宏靜氏　平品平亮氏　桑原茶重氏　池安登氏　魚田美峰氏　松崎美福氏　岡井茂雄氏　白里清華氏　近江清華氏　塚口清雀氏　佐藤清司氏　井上聲鳳氏　的野關路氏　富岡生昇氏　時野盛鶴氏　沼井靜史氏　關口田靜香氏

江原清昇氏　德永靜翠氏　仁木翠松氏

（地方之部）

米國　杉山陶岳氏
同　兼廣廣玉氏
同　西本西紫氏
大阪　氏家鶴峰氏
神戸　岡田源氏
大垣　吉岡十八公氏
船橋　川奈部銀司氏
下關　保良鈴鳳氏
横濱　和田和朝氏
同　鈴木香雀氏
同　田中呑笑氏
同　小林榮玉氏
同　田島集樂氏
平塚　國森鳴門氏
八幡　古賀大彌氏
靜岡　加藤壽松氏
同　森魁氏
清水　久保田聲保氏
安東　岩崎山彥氏
北京　關長門氏

名譽會員

井上聲鳳氏
的野關路氏
和田金扇氏
和田春和氏
横濱　田島集樂氏

右の諸氏今回本誌後援名譽會員御快諾を賜り難有御禮申上候

太棹社

皇軍の赫々たる武勳に感謝

中

澤

巴

（御芳名掲載順位不同）

皇軍の赫々たる武勲に感謝

互調會

淨聲會

東京 九重會

事務所 京橋區築地二丁目三一

栗原千鶴方

電話築地三〇七一番

大阪 八千代會

事務所 大阪市南區竹屋町一七

吉田文哉方

皇軍の赫々たる武勲に感謝

安藤どくろ

皇軍の赫々たる武勳に感謝

巴津天會

會長 寶藏寺天昇

顧問 竹本巴津昇

相談役 宮島和紅

常務理事 武藤壽昇

事務長 長谷川勇昇

事務所

杉並區和田本町九五一

竹本巴津昇方

電話中野五七九三番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

近江清華

皇軍の赫々たる武勳に感謝

十喜和會

（俳號イロハ順）

井上素鳳　乾桔梗
山下彌生　山田義昇
原田越巴　吉坂玉鳳
坂本あるを　橋本喜雀
藤牧淡路　纐纈紫蝶
齋藤山生　平山平茶
平井軌外　七世豐澤廣助

事務所　京橋區木挽町三丁目九（齋藤山生方）
電話京橋(56)四五一四番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

東都五十義會々長

細川清

本所區東兩國二丁目四

電話本所〇八一八番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

淨曲無名會

（イロハ順）

安藤どくろ
保々長平
河野國聲
高瀬操
桑原美峰

（後見）
鈴木和樂
星野桔梗

神田區花房町三
（河野方）
事務所
電話下谷五四〇〇番

芳聲會

（イロハ順）

里芳
辰壽
一重
千壹
清芳

豐澤芳太郎

皇軍の赫々たる武勳に感謝

兜會々長

鈴木松寶

皇軍の赫々たる武勲に感謝

義松會

三口松藤柳有明
田中司若美保
澤部其角中村小六
鎌田光昇
澤地鯉昇
淺居日之出

豐澤松造
豐澤松市郎

皇軍の赫々たる武勳に感謝

京橋區小田原町一丁目一四（木村別館）

銀座義榮會

電話築地二三七六番

事務員　中居改メ　金澤謙治郎

香伯會

鶴澤觀西翁

鸚鵡會

會員一同

事務所　澁谷區金王町九（竹本染登方）

皇軍の赫々たる武勲に感謝

長谷川文久

吉田三芳

高瀬操

安藤光樂

（イロハ順）

皇軍の赫々たる武勲に感謝

横井三由

東京不動産通信社

社長 岩田幸左衛門

（號 未成）

東京市芝區西久保櫻川町廿四番地

電話 芝(43)一八四〇番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

伊藤松鶴

乃村乃菊

德永靜翠

東京市京橋區銀座六ノ四
電話銀座(57)一九九五番

皇軍の赫々たる武勲に感謝

和田金扇	齋藤山生	及川旭

皇軍の赫々たる武勲に感謝

武笠宏亮	白井清華	松岡語松

皇軍の赫々たる武勳に感謝

星野桔梗

湯淺光玉

繪解芝居追々出來ます。御利用を願ひます。

太十、壷坂合邦
揚屋、柳、寺小屋
忠五、忠六、野崎
其他

東京市日本橋區吳服橋二丁目三
奥村鑛業所
奥村三玉
電話日本橋(24)〇九三四番

皇軍の赫々たる武勲に感謝

女天會

事務所　本所區向島須崎町八六番地
（黒川叶方）　電話墨田五〇六八番

神馬里芳
鶴澤勝助

皇軍の赫々たる武勳に感謝

增田喜城
增田喜香
芝區田村町五ノ八
電話芝四〇九六番・四六〇五番

吉田登盛

沼井盛鶴
野澤粂一郎

皇軍の赫々たる武勳に感謝

米澤雅樂

京橋區京橋一丁目九番地

美術商

關口靜香

關口以與子

金子里子

皇軍の赫々たる武勳に感謝

國森鳴門

三並義昌

日本義太夫因會

男子部一同

事務所　赤坂區田町六丁目四番地

電話赤坂三〇四七番

皇軍の赫々たる武勲に感謝

栗原千鶴	大用大嘉津	大築葵
保谷紅司	菊地秋月	野田高尾

皇軍の赫々たる武勳に感謝

寺岡三幸	平井榮	淺田奇聲
吉川浪補	川口子太郎	平山平茶

皇軍の赫々たる武勳に感謝

野口みなと	京濱素義聯盟會々長 國友東光	綾秀會一同
三好會 本宅 岐阜縣武儀郡菅田町 寓居 小石川區水道端町一丁目二三 三好 小石川區江戸川町十一番地戸塚方 義太夫練習所 電話小石川一五〇六番	安藤都昇	江原清昇

皇軍の赫々たる武勳に感謝

豐島區千早町二丁目三六 岡田蝶花形 電話落合長崎三〇四七番	亀田松花	須田美義
篠倉山門	中村白猿	和狂改 青山和曉

皇軍の赫々たる武勲に感謝

松岡茂里雄	藤本喜鳳	坂本あるを
緒方千晴	山田義昇	森市菊

皇軍の赫々たる武勳に感謝

鈴木和樂	高橋可遊	廣瀨いろは
水戸部いづみ	小川都山 小川都川	歸山歸世花

皇軍の赫々たる武勲に感謝

錦　錦　松

御料理　二葉　錦　さと

深川區白河町一ノ六

竹本都太夫

野澤語左衛門

女歌舞伎　坂東勝治劇身振舞踊協會

座員一同

太夫元　魁家廣丸

事務所　東京府下吉祥寺二七四三　電話吉祥寺町五〇番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

東京人形淨瑠璃復興會

南北座

池田三國

目黑區中目黑四目丁一四七五
電話大崎(49)三八二一九番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

竹本素女

女義

若女會

事務所　芝區巴町四一番地（竹本素女方）

電話　芝(43)二五七七番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

淺草公園六區

義太夫座

電話淺草(84)三六三〇番

橘館

電話淺草(84)一五九八番

竹本駒若

自宅　淺草區田島町三九番地

皇軍の赫々たる武勳に感謝

佳照會

會員一同

竹本佳照

淺草區柳橋一丁目七番地

電話淺草(84)七三五九番

皇軍の赫々たる武勳に感謝

竹本重子 鶴澤勝八	竹本土佐廣	鶴澤綱助
	鶴澤清一	豐澤松榮

皇軍の赫々たる武勳に感謝

日本義太夫因會

女子部一同

事務所　芝區巴町四一番地（竹本素女方）
電話　芝（43）二五七七番

女優身振劇

竹澤龍造一座

座員一同

竹澤龜次郎

皇軍の赫々たる武勲に感謝

清水市旭町（株式店）
久保田聲保

靜岡市南町一丁目七
加藤壽松

神戸市須磨區西垂水町
岡田源

大阪市東區兩替町一丁目二三
西村紫紅

京城府日ノ出町一三
志岐紫扇

大垣市城畔
吉岡十八公

皇軍の赫々たる武勲に感謝

日本因協會

事務所
大阪市西成區粉濱中ノ町
四丁目一三六六番地
（金杉彌太郎方）
電話住吉三一四五番

旭勝會

大連市信濃町四一
電話二、七〇七五番

滿洲國安東市
金桶暉鳳

川崎市大師町一七八九
小島古清

船橋市宮本町
川奈部銀司

編輯後記

▽戰捷の新年を迎ひ先以ておよろこび申上ます　今頃になつて年頭の祝辭を申上げねばならない程一月號が延刊してしまひました事は何んとも恐縮に堪えませんが、何しろ永年の印刷所の手不足が最近は甚だしくなり毎月延刊々々で、これではどうにもなりませんので今年から印刷所を變更致しました處、新活字や組み方など、種々整へませんから止むを得ぬ遲刊となりました次第で、何卒御諒承の程をお願ひ申上げます。

▽因會の女子部が皇軍の赫々たる武勳に感謝の意を表して獻金興行を催ほした事は誠に美しい話で、今後斯界にかゝる企ての催ほしが望ましいものであります。

▽『みどり』發行者の松本翠影氏は毎旬會の都度會費と同額程度の金を貯金して或期間を經過したら一括して國防獻金するといふ事を企てましたが、素義會も毎夜の席の催ほしで、その夜の經費に一割位を掛けて此の一割の金額を席亭に預けをき、矢張り或る期間を過ぎたら各席から集めて、これを獻金するといふ事なども皇軍の精鋭に感謝の微意を表するに好い思ひつきではなからうかと思ひます。

▽白井清華氏が素義界から飛行機義太夫號を獻納したいと五六の人々に圖られたさうですが纏らず、面倒臭くなつて一人で一萬圓獻金した等の話も耳に致しましたが、毎夜の催ほしの積立金を基礎として義太夫號の一機位獻納したいものであります。

▽本號の表紙繪は以前に齋藤清二郎氏からお書きを願つてをいたものですが、丁度今度、古輒太夫の櫓下を襲ふ出し物が陣屋でありましたので、今年はこの『熊谷』を用ゐる事に致しました。

▽病氣御靜養中の紅雨莊主人氏から御寄稿がありましたが、最早校正も終りましたので、次號にまはさせていたゞきました。

▽齋藤金太郎氏からも次號から「義太夫と新体制」を送稿するとお便りがありました。

▽齋藤拳三氏は本號に新橋演舞場の文樂評を書く筈でありましたが、歳末から正月にかけての風邪を大事にして、いづれ二月號に執筆する事になりました。

▽本號の延刊から今後毎月廿五日發行に變更致しました　御通信もそのおつもりに御投函を願上ます。

――芳河士――

第百三十二號　（毎月廿五日發行）

定價

一部	六月分	一年分
金三十錢	金一圓八十錢	金三圓
郵稅五厘	郵稅共	郵稅共

廣告料

特別	晉通
一頁	一頁
金參拾圓	金貳拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なるべく振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增

昭和七年一月廿三日　印刷納本
昭和七年一月廿五日　發行

東京市小石川區音羽町一ノ一四
編輯兼發行人　富取壽鹿

東京市下谷區御徒町一ノ三
印刷人　洞派一雄

東京市下谷區御徒町一ノ三
印刷所　大山印刷所
電話下谷三七四四

東京市小石川區音羽町一ノ一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十七年一月廿二日　印刷納本
昭和十七年一月廿五日　發行

（毎月一回　廿五日發行）

本棒（第百三十二號）

（定價㊄參拾錢）

皇軍の赫々たる武勲に感謝

製函・製材・土木・建築
運送・勞力供給・演藝部　業

籠寅商店

保良鈴鳳

出張所（東京、横濱、名古屋、京都、大阪
神戸、廣島、小野田、門司、戸畑）

本部下關市

電話一七一二番、　二二九〇番、　二八四八番
運送部（代表）長四一一番　製函部（代表）〇七一七番
建築部（代表）一四七六番　演藝部（代表）二四六六番